

遊牧民女性の技と記憶

——西北アナトリア、ヤージュ・ベディルの人びととの交流から——

江川ひかり

1. はじめに：アリーじいさんとの出会い

「わしの名は アリー・ギョク (Ali GÖK) じゃ」

「1840年の史料にギョク・アリーオウル・アリーという人が記録されていますが」

「それは、わしのじいさんじゃ」

(トルコ共和国バルケシル県ビガディチ郡ヤージュベディル村)

まさにこの時、1840年にオスマン語(アラビア文字表記のトルコ語)で記録された「ギョク・アリーオウル・アリー」の文字から、2001年8月4日(水)にヤージュベディル(Yağcıbedir)村を訪問したわたくしたちへ、電撃が駆け抜けた。

この記録とは、『資産台帳 *Temettüat Defteri*』¹⁾と呼ばれ、オスマン帝国(1300ごろ～1922)が「近代化」改革に着手した1840年に住民の資産および収入を把握し、いわゆる資産・所得税を確定するためになされた調査記録である。村の名ともなった「ヤージュ・ベディル(Yağcı Bedir)」とは、オスマン帝国時代に公文書で確認される7千から1万あまり存在した遊牧民グループのひとつである。

ヤージュ・ベディル遊牧民グループ(以下、ヤージュ・ベディルと呼ぶ)は、古くはヤイジュ、あるいはヤイジュラルと呼ばれた。トルコ語でヤイ(yay)は「弓」を意味し、ジュ(+cı)は「～屋・職人」を表す接尾辞である。つまり、彼らは弓作りに長けていた専門職集団で、税として弓を現物納してきた。しかし、火器の普及に伴い、武器としての弓の重要性が低下することによって、ヤージュ・ベディルは弓作りを断念した。そして弓職人を意味するヤイジュ(Yaycı)ということばも、いつしか人びとが発音し易い「ヤージュ(Yağcı)」へ変化し、さらにベディルリュ(Bedirlü)村を冬営の幕営地にしたために、「ヤージュ・ベディル」と呼ばれるようになっていったと考えられる。

『資産台帳』およびその他の公文書によれば、1840年代、ヤージュ・ベディルは東西地域に大きくわかれており、東にはバルケシル郡の南東に隣接するビガディチ郡に36世帯、スンドゥルグ郡に合計211世帯が、そしてバルケシル郡の西方のベルガマ郡にも別の一帯が住んでいた。

アリーじいさんは、自分の年齢を最初に74・75歳、その後に85歳だといった。アリーじいさんの父は、同じビガディチ郡内のカヤルデレ村からここへ来た。アリーじいさんの父は、メフメト、メフメトの父がアリーという名だったという。

トルコでは、トルコ共和国成立(1923)以前、一般庶民は姓をもたないかわりに、家系名や

身体的特徴等が付された名で呼ばれていた。共和国で姓名法が公布され、すべての人が姓をもつようになったのは1934年のことである。アリーじいさんにつながる家系は、『資産台帳』で二人確認された。一人は「長身の、うす茶のあごひげの、ギョク・アリーオウル・オスマン」で、もう一人は「長身の、黒いあごひげの、ギョク・アリーオウル・アリー」²⁾である。この場合、「ギョク・アリーオウル（ギョク・アリーの息子）」が、家系名で、アリーが名である。つまり、ギョク・アリーオウルと仲間うちで呼ばれている家系には、当時、オスマンとアリーという兄弟あるいは親子がいて、別々の納税戸として記録されたことになる。これらのうちの後者の「アリー」が、アリーじいさんの祖父にあたるかどうかは、一世代を30年と考えた場合、少し無理があるかもしれない。あるいは記録された「アリー」は、アリーじいさんの曾祖父にあたる人物とも考えられる。いずれにしても、アリーじいさんの現在の姓「ギョク」と名「アリー」が、家系名「ギョク・アリーオウル」に由来することは明白であった。

「ギョク gök」とは、「空、天国」「碧、青、蒼」を意味する古いトルコ語で、「ギョク・テュルク」といえば、中央アジアの古代トルコ系民族のことを指している。おそらく、アリーじいさんの先祖の瞳が碧色（青あるいは青緑）だったと思われる。実際、アリーじいさんの瞳は、まさに碧色だった。

アリーじいさんの先祖を含め『資産台帳』に記録されたビガディチ郡帰属「ヤージュ・ベディルリ」グループは、36世帯である。わたくしたちは、36世帯すべての家系名をアリーじいさんに尋ねた。

「コンヤルオウルという家系を知っていますか？」

「あー知っとるよ。その父さんはコンヤから来たんだ」

「テキシオウルは？」

「わしの親戚にいるよ」

「タートルオウルは？」

「わしの父方のおじじゃ」

アリーじいさんによれば、ヤージュベディル村は、古くは「ユムルクル Yumruklu・ヤージュベディル」といった。「ユムルクル」とは、「Yumruk こぶし、げんこつ」に、属性を表す「+lu」がついた「こぶしの」という意味である。ただし、アリーじいさんは、この名の由来については「知らんなー」と答えた。

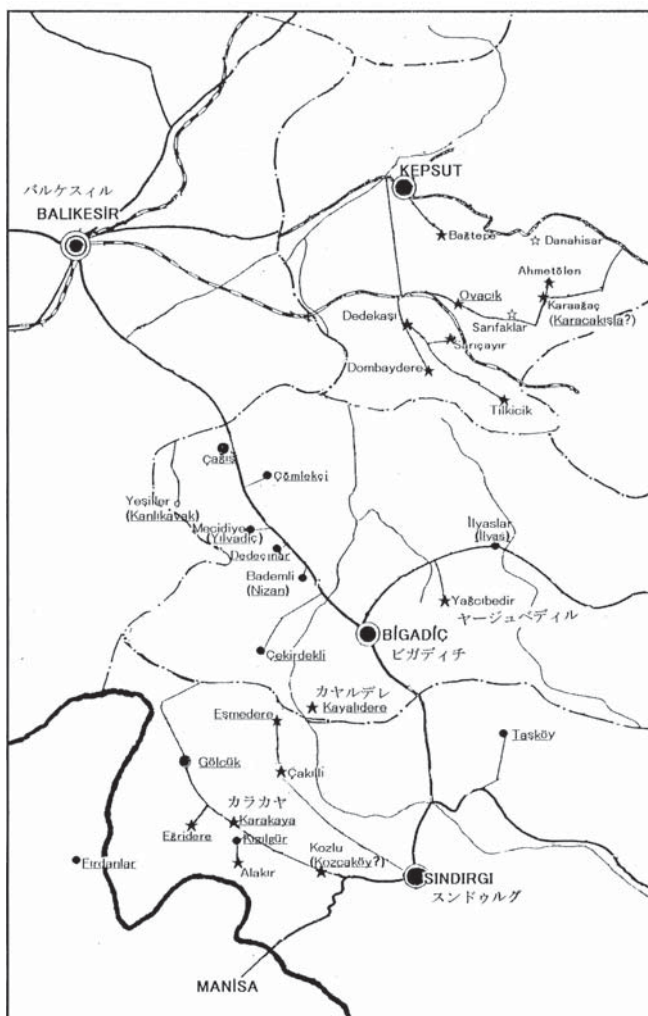
アリーじいさんの父は、昔、この村へ、母方のおじのヒツジを放牧しにやってきて、アリーじいさんの母をみそめて、そのまま自分の村から出て、結婚したという。アリーじいさんの母がアリーを身ごもったとき、父は、イスタンブルへ兵役に行っていた。そのため、アリーじいさんが生まれたとき、すぐに出生登録ができなかったという。アリーじいさん自身、はっきりとした誕生日を知らない。ただし、母はアリーじいさんに、こう語ったという。

「おまえが生まれたとき、収穫物が鎌の上にあった、収穫物にイナゴがよってきた」

この語り伝えから類推すると、アリーじいさんは7月か8月に生まれ、いなごの害に見舞われた年だったと推察される。さらに、100年か150年前に村長をしていて、35～40年前に亡くなった、アリーじいさんの母方のおじであるムスタファが村の長老たちに聞いた話では、「ユムルクル・ヤージュベディル」村には、最初は7世帯が住んでいた。アリーじいさんが12・13歳のころには15世帯になったという。アリーじいさんが、少なくとも75歳と仮定すれば、1938・39年ごろに、この村には15世帯が住んでいたということになる。

その後「ユムルクル・ヤージュベディル」から改名された今日のヤージュベディル村には職がなかったために60世帯がビガディチ郡の中心部へ移住し、残りの60世帯が今も残っているという。ただし、ヤージュベディルは、1840年の『資産台帳』に記録されたように、現在もビガディチ郡ヤージュベディル村や周辺のカヤルデレ村などに住むビガディチ郡グループと、隣接するスドゥルグ郡カラカヤ村などに住むスドゥルグ郡グループとに分かれて、住んでいることが判明した。そして、何よりも彼らは今も「ヤージュベディル遊牧民出身だ」というアイデンティティを保持し続けているのであった。

その後、2005年にカヤルデレ村を訪問したとき、ヤージュベディル村のアリーじいさんが「一昨年ぐらい前に亡くなった」と聞いた。1840年の公文書と現代とをつなぐ歴史の瞬間に立ち会うことができたのも、アリーじいさんとの出会いのおかげであった。アリーじいさんのご冥福を心からお祈りしたい。



地図凡例

村名 19世紀史料に記されたヤージュ・ベディルの定住地・村

★ 今日のヤージュ・ベディルの村

☆ 今日、ヤージュ・ベディルが一部を占めている村

出典 *Cumhuriyetin 50nci Yılında Balıkesir 1973 İl Yıllığı*,

İstanbul; 江川 (2006) の地図をもとに作成

2. 「語りえない者の語り」に耳をすます

文字に書いて残すと、誤解を生ずるので、実地に身体^{からだ}で学ぶのが、穴太衆^{あのを}の伝統である

白洲正子は、著作『日本のたくみ』³⁾のなかで、本格的な石積み職人、粟田万喜三^{あわた まきぞう}の上記のことばを伝えている。かつてあるお寺から四疊敷もある大きな石が山から落ちた時、石を見分ける名人が、石の目を見分けるために何日も黙って石を見ていたという。そのため、白洲が粟田に「何かそういうことを書いた本か、古い文書でもありませんか」と尋ねた時の返答である。ただし、穴太衆^{あのを}と呼ばれた石積みを専門とする集団の石工は、白洲によるかぎり、1979年（昭和54年）には、粟田ただ一人が残るのみであった。

遊牧民の知恵と技も、同様に口伝によって親から子へと伝承されてきた。そして同時にまた、これらも消滅の危機に瀕している。この1979年は、人類学者松原正毅がトルコ共和国において遊牧民、チョシュル・ユルック（Çoşlu Yörük）とともに生活していた時期と重なる⁴⁾。松原はチョシュル・ユルックと一年以上、遊牧生活をともにすることによって、トルコ系遊牧民に関する、世界でもっとも体系的な人類学調査を日本語で記録した。わたくしたちにとって、この記録を日本語で読むことができたことは、なんとという幸運であろうか。

白洲と松原とは、アジアの東と西とで、人類が自然と共生するために語り伝えられてきた知恵と技とが、確実に消えつつあるぎりぎりの瞬間に、自らの足で歩き、目で見、耳で聞き、土や風の匂いを嗅ぎ、体感したといえるのではないだろうか。粟田が指摘するように、「文字に書いて残すと、誤解を生じる」ことは確かであろう。しかし、誤解が生じることをひきうけてもなお、あえて文字に書いて残さなければ、これまで語り継がれてきた知恵と技とが消滅してしまう瞬間には、最終的選択をすべき時があるということだ。

松原がチョシュル・ユルックとともにした「夢のような」生活を終えたのは1980年である。その年、北茨城の農民歌人、飯塚^{いしお}可男は、

米余る世になりしかどうまき米作らむ誇り今も身に持つ

と詠んだ。生涯北茨城を出ず、ひたすら稲を作り続けた飯塚可男の全作品を収集した吉田ちづゑ⁵⁾は、それだけに、飯塚の稲作りの歌は、「昭和戦前期を含む半世紀間の、日本の稲作の栄光と衰亡を見続けた、定点記録となった」と述べている。たとえ「文学性に乏しいと批判された」としても、飯塚は、DDTによって蛍が消える瞬間をとらえた。飯塚の短歌を読み続けていくと、日本の農政の紆余曲折と北茨城における農業の「近代化」とが、農民を翻弄していった経緯が理解できる。短歌という作品がもの言う語りの場となり、歴史を刻印したといえよう。

日本において、歴史学・民俗学における口承の重要性をいちやく指摘し、戦前から日本を旅し、「無字社会」と「有字社会」との有機的連関を説いたのは宮本常一であり、『忘れられた日本人』はその代表作であろう。この中で、宮本が記述した「私の祖父」とは、宮本の祖父市五郎のことで、小犬、亀、みみず、カニなどの動物と人間とが共生してきた営みを描いている⁶⁾。歴史学研究におけるオーラル・ヒストリーの重要性は、とりわけ近現代史研究においてはもは

や不可欠な研究資料・方法と位置づけられている⁷⁾。

さて遊牧とは、家畜化された群居性有蹄類（ヒツジ、ヤギ、ウシ、ウマ、ラクダなど）とともに移動する生活様式である⁸⁾。遊牧の起源は、諸説あるが、季節の変化に応じて移動する動物を、人間が追尾することであったという。このように動物の移動から季節移動を学んだ人間が、こんどは逆に動物を管理することができるようになり、家畜化したのであった。

遊牧という生活様式の主な特徴としては、次の5点を挙げるができる。第一に、固定家屋をもたず、季節移動をする、すなわち移動生活を営むこと。第二に、移動生活が基本であるために、過剰な生産・所有をしないこと。第三に、土地や自然を所有するという観念をもたず、自然と共生することによって成り立つこと。第四に、移動や牧畜には核家族での行動はなりたらず共同作業が基本で、かつ男女が同じように労働する平等主義の原則がみられること。第五に、基本的に自らの歴史を文字で残さないことである。

これらのうち、第五に挙げた点に着目する。もし遊牧民が文字を用いて日記や歴史などを記録したとしよう。これらの紙や本は、たちまち荷物になってしまうのだ。移動が基本的な生活様式であるために、第二点目として述べたように、自らの荷物は最低限に抑える必要がある。そのため、記録を残して、それらの書物を蓄積することはできない。記録を紙媒体に残すことは、遊牧生活にとって文字どおり、「重荷」になるだけである。したがって、彼らは自らの歴史や生活の知恵を、記憶し、語り伝えることになる。彼らの生産活動は、大量生産・大量消費にまっこうから反対する、「少量生産・少量消費」である。

その結果、遊牧民の「歴史」といった場合、その大部分は、他者による記録に依拠した「歴史」だった。遊牧民は、定住民あるいは記録を残す側からの書き手によって、粗暴、野蛮、略奪者、山賊などといった表現で記されてきた。そのため、オスマン時代に記された「公文書」に依拠した歴史研究者のなかには、「公文書」の記録を、何の疑問をもたずに読み、「遊牧民は、山賊になった」と論文に書く者がいる⁹⁾。なんとも遺憾なことである。

遊牧民自らが残したものといえば、突厥¹⁰⁾によるオルホン碑文のような文字の記録は極めて少なく、キルギス共和国の各地に点在する石人像（写真1）やヨーロッパのルネサンス文化を飾った遊牧民女性によるじゅうたん¹¹⁾など、文字以外のモノとして、さもなければ、親から子へと語り継がれた伝承であった。したがって遊牧民における語り伝えは、文字を有する文化における伝承以上に、より重要性を増すことは間違いない。例えば、遊牧民を祖とするキルギ



写真1 キルギス共和国石人像 2007年

スの建国に関する歴史は、『マナス』¹²⁾ という長編叙事詩で、これらは長らく口承で語り継がれてきた。キルギスには、現在もなお「マナスチュ」と呼ばれる、「マナス」吟唱家が専門職として存在している。もちろん、口伝されてきた内容が100%真実であるとはいえないだろう。そこには、時代背景があり、語り手の主観もあるからだ。とはいえ文字をもたない人びとにとって、伝承は、文字をもつ人びとにとっての「正史」と同様に重要視されてしかるべきであろう。

そもそも筆者は、19世紀のオスマン中央政府による「近代化」改革によって、地方社会がどのように変容したのか、あるいはしなかったのかに関する研究をおこなってきた。そのなかで、ひとつの事例として、西北アナトリアのバルケシル地方における都市民、村民、遊牧民に関する1840年の『資産台帳』を分析した。この『資産台帳』の中に記された27遊牧民グループのうち2つのグループに、ヤージュ・ベディル (Yağcı Bedir) という名があり、彼らに興味を抱いたのが、1998年ごろのことである。その話を、イスタンブールの古本屋で、オスマン史家イルハン・シャーヒン氏にしたところ、シャーヒン氏もヤージュ・ベディルは重要な遊牧民グループで、実は前々から興味をもってたと即座に言った。そこで、わたくしたちは、ヤージュ・ベディルに関して共同研究をしようということになったのである¹³⁾。

3. じゅうたんの文様で「語る」遊牧民女性

日本人で、ヤージュ・ベディル遊牧民と交流を始めたのは、実はわたくしが最初ではない。作家の新藤悦子がいる¹⁴⁾。新藤は、大学卒業後、単身トルコへ渡り、カッパドキアのトルコ人家庭に住み込んで、じゅうたん織りを習った。一年かけて自分のじゅうたんを織ったのち、じゅうたんそのものに興味を抱き、じゅうたんの産地を訪ねる旅のなかでヤージュ・ベディルの村むらを訪問している。彼女の交流が、ヤージュ・ベディルの人びとにとって、好印象であったことに、わたくしたちは感謝しなければならない。わたくしがはじめてカラカヤ村やその他の村に行ったとき「エツコ、エツコ」と声をかけられたことが、何回かあった。

このようにして、わたくしたちは、『資産台帳』およびその他の公文書を解読して得た情報と、新藤によって紹介された「ヤージュ・ベディルのじゅうたん」に関する情報とを携えて、上述したように2001年8月4日、アリーじいさんのいたヤージュベディル村を訪ねたのであった。

アリーじいさんと別れてから、わたくしたちは、彼の父の出身村、カヤルデレ村を訪れた。このカヤルデレ村、さらに、スンドゥルグ郡帰属のカラカヤ村では、女性たちが今もなおじゅうたんを織っていた。

カヤルデレ (Kayalidere) 村¹⁵⁾ のカヤルデレとは、「岩 (kaya) のある (+lı) 小川 (dere)」という意味である。チャイハネに入り、お茶を飲む男たちとひととおり挨拶を交わすと、前村長ハリル・ベイ (ベイは、男性名につける～さんの意) が率先してわたくしたちに協力してくれた。それから10年間、ハリル・ベイをはじめとするカヤルデレ村の人びとも交流を続けている。彼らはみな「自分たちはヤージュ・ベディル出身だ」と述べた。

カヤルデレ村では、かつてはラクダによる運輸業を営んでいたという。現在、カヤルデレ村には、80世帯、約370人が住んでおり、村民の100%が夏にタバコ栽培をし、70%が牧畜も営み、9・10月から3・4月にかけては、女性たちがじゅうたん織りをするという。カヤルデレ村は、

かつてはスンドゥルグ郡に帰属していたが、郡境が変更された結果、現在はビガディチ郡に帰属している。

ハリル・ベイは、わたくしたちを翌日に、ヤージュ・ベディルが定住した他の村むらを案内してくれるといった。そのため、わたくしたちは、2001年8月5日に、ふたたび、ハリル・ベイを訪ねて、一緒に、まずはスンドゥルグ郡カラカヤ（Karakaya）村へ向かった。カラカヤとは、「黒い（kara）岩（kaya）」という意味で、村に入ったすぐの右手に、大きな黒い岩があった。カラカヤ村は、小麦やトマトなどの野菜、タバコ等が栽培され、ウシ、ヒツジ、ヤギの牧畜業もおこなわれ、ヨーグルトやチーズ等の乳製品も産出する、比較的豊かな村である。

カラカヤ村は、すでに新藤悦子に紹介された村で、新藤が滞在していたというゼキ・ベイと会うことができた。ゼキ・ベイは、農耕牧畜を営んでいたが、この村一番の識者のように思われた。ゼキ・ベイの父、イブラヒム・ベイは80～85歳であったが元気そうにわたくしたちの質問に答えてくれた。

「15歳の時まで夏営地にのぼっていたよ。それ以降はのぼらなくなった。

夏営地は、80km離れた、スンドゥルグとドゥルスンベイの間にあるアクダーだった。」

イブラヒム・ベイは、1860年代にヤージュ・ベディルが定住化させられたときのエピソードも語り伝えてきた人物だった。

1860年代の政府による遊牧民定住化政策は、オスマン公文書にも記録された有名な事件であるため、ヤージュ・ベディル遊牧民の間にも語り継がれていた。今日のビガディチ郡カヤルデレ村、あるいはスンドゥルグ郡カラカヤ村住民は、1860年代に、中央から派遣された視察官にチャドル（テント）を解体して遊牧生活をやめるように命令され、強制的に定住させられたため、当時の視察官を「テントを壊したバシャ」と呼んでいたという。しかし、しかるべき季節がくると、家畜が山の方を見て鳴いたので、多くの遊牧民は再び夏営地へ上ったという。

この「テントを壊したバシャ」という伝承は、実はヤージュ・ベディル遊牧民のみに語り継がれたエピソードではなかった。ヤージュ・ベディルと同じようにバルケシル地方およびベルガマやマニサ地方に生活し、19世紀後半に定住化させられたチェプニ（Çepni）という遊牧民にも同様の内容が語り継がれている¹⁶⁾。

その後、イブラヒム・ベイは、家の中で臥していることが多くなり、この2001年に会話したのを最後に、会うことはかなわなくなった。イブラヒム・ベイとの出会いも、ひとつの語り伝えを聞く、最後の瞬間だったといえる。

カヤルデレ村でも、カラカヤ村でも村人は、100%近くじゅうたんを織っている。現在、トルコで一般に「ヤージュ・ベディル」といえば、「ああ、じゅうたんで有名ね」ということが返ってくる。それほどヤージュ・ベディル織りのじゅうたんは、トルコで数ある有名な「伝統的じゅうたん」の一つである。

ただし、「伝統的じゅうたん」といっても、それらは、写真2のように大きな織り機を家の中に設置しているため、各遊牧民グループが定住後に始めた家内工業といえるだろう。すなわち、ルネサンスに奢侈品としてヨーロッパに輸出され、もてはやされたアナトリアのじゅうたんは、

オスマン帝国期の初期にウシャクやクラなどに定住した遊牧民によるものだと考えられる。なぜならばこれだけの大きな織り機一式をラクダやロバの背に乗せて、移動生活を行なうのは困難だからだ。ヤージュ・ベディルが急速に定住していくのは19世紀後半であるため、「伝統的じゅうたん」といっても150年ほど前から始まったということになる。



一般にじゅうたんは、遊牧 写真2 カラカヤ村一番のじゅうたんを織る母と娘 2001年
民の女性によって織られる。

白い縦糸に、染色された横糸をひっかけていくという細かい作業には女性の指が向いているからだという。ヤージュ・ベディルのじゅうたんに使われる伝統的な色は、黒、白、赤、茶色、紺の5色である。じゅうたんの典型的なサイズは、約1メートル×1.2メートル(あるいは1.5メートル×2メートル)である。このサイズのじゅうたんを、女性1人が約1ヶ月で織るという。まさに「少量生産」である。ヤージュ・ベディルのじゅうたんとして伝統的な特徴は、次の三点に整理される。

第一に、使用される色が、上述した5色に限定されていることである。そのために、少しじゅうたんの知識があるトルコ人なら、「ああ、これはヤージュ・ベディルね」とわかることになるのだ。ただし、カラカヤ村のゼキ・ベイの姪は次のように語ってくれた。

「じゅうたんを織る時は、色の名前が、普通に使うトルコ語とはちがうのよ。現代トルコ語の赤 (kırmızı) をサル (sarı) といい、臙脂 (koyu kırmızı = 濃い赤、あるいは kahve rengi = コーヒー色) をナルンチュ narınçı といい、紺 (koyu mavi = 濃い青、lacivert ラージュヴェルト) をギョク gök と呼んでいるの。朱 (portakal) はキョク・ボヤ kök boya と呼ぶの。織り機の前に座ると、昔の名前が降りてくるのよ」

現代トルコ語では、サルは黄色、キョク・ボヤは茜や天然染料、ナルンチュはざくろ色、ギョクは、冒頭で述べたアリーじいさんの姓で空や蒼・碧色を表している。これらは、あたかも日本における、萌黄色や若草色のような古名に匹敵する。いわば、じゅうたん織りに使用される古名を専門用語として女性たちが守り続けているということがいえるのではないだろうか¹⁷⁾。

第二に、じゅうたんに織り込まれるモチーフの一つ一つに名前がついており、意味も持っていることである。例えば、弓入れ、松ぼっくり、ヒツジの目などである。新藤は、じゅうたんの新しい図柄には「それを考えた女の思いがこめられている」という老婆のことばを書きと

めている。つまり、じゅうたん一枚にどのようなメッセージが織り込まれているかを、わたくしたちが考えなくてはならないことになる。

例えば写真3には、外側に赤い枠がありその中に松ぼっくりが、さらに松ぼっくりの赤い枠の内側に細い白い枠がありその中にハートのマークのような連続した文様がある。これが弓入れである。ヤージュ・ベディルのもとの名であるヤイジュ（弓職人）を想起させる痕跡といえる。写真4では、右下に「雪国のかまくら」のような赤い濃淡の文様がたくさんみられるが、これが「ヒツジの目」を意味している。そして外枠の外側と内側とに赤地に紺色の蛇行する文様が「ラクダの首」である。松ぼっくりは、遊牧民が移動する際に、森や林を歩く時の身近な植物である。「ヒツジの目」は、東地中海一带に見られる邪視を避けるため

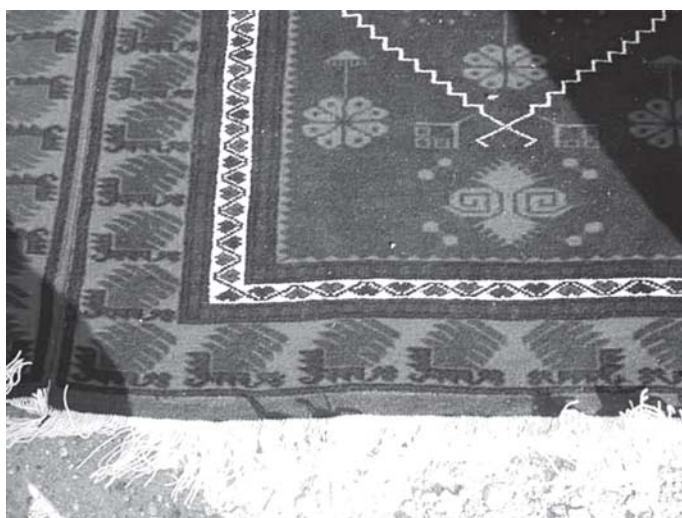


写真3 松ぼっくりと弓入れ



写真4 「ヒツジの目」と「ラクダの首」

に女性や弱者・家畜につける目玉のお守りと同じ役割を果たしている。ラクダは、遊牧民の移動に欠かすことができない、乗用車がわりになる家畜である。

さらに興味深いことは、松ぼっくりが描かれている赤い外枠部分を「赤い河、大きな河 (sari su, koca suyu)」などと呼び、弓入れが織られている白い枠部分を「白い河 (ak su)」と呼んでいるのである。このような名称の起源や影響に関しては、ゾロアスター教での水の重要性や生活一般における水や川の重要性も考えられている。さらには、松原による遊牧民の移動生活を観察すると、彼らは家畜とともに河沿いを移動するが、多くの河を渡ることが如何に大変なことが理解できる。

第三に、ヤージュ・ベディルのじゅうたんは天然染料を使用しているという。

以下に天然染料として使用される植物として、オズテュルクが紹介しているものと、わたくしたちの聞き取ったものを列挙した。

	Öztürk (1992)	江川・シャーヒン聞き取り
朱	kök boya (茜)	
赤	kavak kabuğu	kök boya, sarıkız otu
	ポプラの果皮	茜の根, 赤褐色の草
紺	alabada kökü	alabada kökü, indigo
	わせすいばの根	わせすいばの根, 藍
茶		ceviz kabuğu
		胡桃の果皮
黒	boş yaprağı	ceviz kabuğu, kızıl çınar
	枯れ葉	胡桃の果皮, 赤プラタナス
白	自然の羊毛	自然の羊毛
黄		kekik, boş yaprağı (adaçayı), soğan kabuğu, kavak
		タイム, 枯れ葉 (セージ), 玉ねぎの皮, ポプラ

染色するためには、これらの植物を、自然の羊毛とともに鍋で、朝から晩まで煮立てるのだという。その際、触媒剤としては、粉みょうばん、ヨーグルト、ぶどう、レモン、玉ねぎの汁、タイムなどが用いられる。

4. おわりに

2001年から始まったヤージュ・ベディルの人びととの交流は、10年が経過した。初対面の時は、ほんとうに警戒されていたのがよくわかったが、帰国後に写真と手紙を送り、その後も足しげく村むらを訪れ、研究成果としての論文や本を差し上げるにつれて、今ではみなさん親戚のようにつきあってくださることに心から感謝している。カラカヤ村のエミネおばさんは、訪問すれば、「私の娘!」とあって、毎回、「どうしてこの家に住まないの?」と問いただす。

彼女・彼に語り継がれてきた19世紀の伝承は、公文書等の記述史料とほぼ合致することが明らかとなった。トルコ諸語の話者は、例外を除いて、歴史的に文字をもたなかった。そのトルコ系の人びとのなかでも記録することを慣習としなかった遊牧民の、さらに歴史の舞台にごくまれにしか登場しない女性たちが、じゅうたんという作品を通して、なんと饒舌に語りかけていることだろう。女性たちの手や五感に継承されてきた、知恵と技とに目を向け、何を語っているのかに耳をすませ、見、聞き、感じ、読み取るのはわたくしたちの責務であろう。そのような目をもっていなければ、ただのじゅうたんで終わってしまうのである。

もちろん問題点や疑問はつきない。彼女・彼の記憶とは、いったいつからの「記憶」なのか、伝統とはいったいつからの「伝統」なのだろうか。そのような考えを思いめぐらせていたとき、カラカヤ村で女性たちが突然、白い縦糸の寸法を計る作業を道ばたで始めた。女性たちは、まさしく自らがあっちへ、こっちへと走りながら、縦糸を同じ長さ計って、じゅうたん織りの準備をしているではないか! (写真5) そうこうしていると、村の共同窯でパンが焼けた (写真6) から持っていきなさいという。



写真5 縦糸の計測



写真6 共同窯で焼かれたパン

このような自然と共生しつつ共同作業による「少量生産・少量消費」の光景を目の当たりにすると、遊牧生活様式の理念は、定住した今なお健在であるといえよう。それと同時に、今この瞬間も、時時刻刻と消えゆくものがある。それゆえに、一刻もはやく、彼女たちとともに生活しなければならないことを痛感している。

注

- 1) イスタンブル総理府オスマン古文書局所蔵『資産台帳』（BOA, ML. VRD. TMT 7226）。なお、この資産台帳に関する基本事項は、江川（1998）を、ヤージュ・ベディル遊牧民の経済活動および定住化に関しては、江川（2006）（2010）および Egawa & Şahin 2007 を参照されたい。
- 2) ヤージュ・ベディル遊牧民に関する『資産台帳』の全記録は、Egawa & Şahin 2007 ss. 169-237 に、2001年および2002年におけるヤージュ・ベディルに関する現地調査の一部は同書 ss. 239-264 を参照されたい。
- 3) 白洲正子（2009）pp. 30-40.
- 4) チョシュル・ユルックに関しては松原（2004）（1990）が記された。また、トルコにおける口承による歴史を書きとめた松原（1988）がある。最新の遊牧研究に関する論文集として、松原正毅；小長谷有紀；楊海英（2005）も必読書である。
- 5) 吉田ちづゑ（2010）.
- 6) 宮本（2005）pp. 193-213.
- 7) オーラル・ヒストリーの重要性については例えば、『歴史学研究 小特集 方法としての「オーラル・ヒストリー」再考（I）および（II）』を参照されたい。

- 8) 遊牧の起源や遊牧の生活様式に関する基本的事項は、松原（1990）（2004）を参照されたい。
- 9) この点については、江川（2006）のなかで紹介した。
- 10) 6世紀半ばから8世紀半ばにかけて、モンゴル高原を中心とした地域で勢威をふるったトルコ系遊牧民集団。
- 11) Aslanapa（1988）なお、世界史上、遊牧民が果たした役割およびルネサンス文化を彩った遊牧民のじゅうたんの概要については、江川（2009）においても紹介した。
- 12) 若松寛（2001/2003/2005）。
- 13) ヤージュ・ベディルに関する歴史的考察は、江川ひかり（2006）および Egawa & Şahin（2007）を参照されたい。
- 14) 新藤悦子（1990）。
- 15) トルコ共和国バルケシル県ビガディチ郡帰属。以後、筆者は、カヤルデレ村およびカラカヤ村を2001, 2002, 2004, 2005, 2008年に訪問。
- 16) Sümer（1992）s. 123.
- 17) これらの色名に関しては、新藤も同様の聞き取りをしている（pp. 98-99）。

参考史料

イスタンブル総理府オスマン古文書館所蔵（BA, ML. VRD. TMT 7226）

主要参考文献

- Aslanapa, Oktay（1988）*One Thousand Years of Turkish Carpets*, Istanbul.
- Ayhan, Aydın（1997）*Balıkesir ve Çevresinde İskân Hareketleri*, Ankara.
- 江川ひかり（1998）「19世紀中葉バルケシルの都市社会と商工業—アバ産業を中心に」『お茶の水史学』第42号、お茶の水女子大学読史会、pp.1-42.
- 江川ひかり（2006）「19世紀オスマン帝国における遊牧民と土地—ヤージュ・ベディルの事例を中心に」『西南アジア研究』第64号、京都大学西南アジア研究会、pp.35-61.
- Egawa, Hikari & Şahin, İlhan（2007）*Yağcı Bedir Yörükleri :Bir Yörük Grubu ve Hayat Tarzı*, İstanbul.
- 江川ひかり（2009）「グローバルゼーションと遊牧民—西アジアにおけるヤージュ・ベディル遊牧民の事例から」『戦いと用いの比較文化史的研究』立命館大学大学院文学研究科人文学専攻総合人文学専修、pp.79-86
- 江川ひかり（2010）「徴税請負制度に立ち向かう遊牧民：西北アナトリア、ヤージュ・ベディルの事例から」『歴史と地理（No.636）：世界史の研究』224、山川出版社、pp.1-15.
- エレン, A. ナジ（1999）『トルコ手織り絨毯』（山田まりこ翻訳・追録）、İstanbul.
- 松原正毅（1988）『トルコの人びと—語り継ぐ歴史のなかで』NHKブックス564.
- 松原正毅（1990）『遊牧民の肖像』角川書店.
- 松原正毅（2004）『遊牧の世界—トルコ系遊牧民ユルックの民族誌から』平凡社ライブラリー（初版は中公新書683/684, 1983）.
- 松原正毅；小長谷有紀；楊海英編著（2005）『ユーラシア草原からのメッセージ—遊牧研究の最前線』平凡社.
- 宮本常一（2005）『忘れられた日本人』岩波文庫（第50刷）（初版1984）.
- Öztürk, Yeşim（1992）*Balıkeir-Sındırgı Yöresi Yağcıbedir Hahları*, Ankara.
- 『歴史学研究 小特集 方法としての「オーラル・ヒストリー」再考（I）—オーラル・ヒストリーへの接近』第811号；『歴史学研究 小特集 方法としての「オーラル・ヒストリー」再考（II）—オーラル・ヒストリーの実践』第813号、歴史学研究会、青木書店、2006.
- 白洲正子（2009）『日本のたくみ』新潮文庫（第12刷）（初版1984）.
- Sümer, Faruk（1992）, *Çepniler*, İstanbul.

遊牧民女性の技と記憶（江川）

新藤悦子（1990）『羊飼いの口笛が聴こえる―遊牧民の世界』朝日新聞社。

若松寛訳（2001/2003/2005）『マナス―少年篇』『マナス―青年篇』『マナス―壮年篇』（東洋文庫）平凡社。

吉田ちづゑ（2010）『米 余る世になりしかど―昭和の農民短歌の怒り』桂書房。

*本稿は、2010年3月10日（水）に立命館大学・衣笠キャンパス（諒友館3階839号室）にて開催された、ヴァナキュラー文化研究会（研究代表者ウェルズ恵子・立命館大学）における発表をもとに加筆したものである。加えて、本研究の調査は、1999年4月から2009年3月まで立命館大学在職中になされた。その間、本研究にたいして常にご尽力くださった、立命館大学研究支援センター・リサーチオフィスのみなさまへ心から感謝申し上げます。

